

裴鏘『傳奇』における「奇」

中國文學 曹 述 燮

現在我々はおおよそ唐の小説を傳奇という名で呼んでいる。その發想は勿論六朝の志怪が「怪を記す」と同様、「奇を傳える」という點に求められる。しかしここで言う「奇」が果たして何を指しているのであろうか。この奇の内容を摸索するとき、裴鏘の小説集『傳奇』を取り擧げて

考察してみるのは、極めて有效な手段だと思われる。なぜなら第一に、裴鏘は自分の書いた小説を纏めた作品集を、他でもない『傳奇』と名指しているからであり、第二に、傳奇が唐代小説を概稱するようになったのは、裴鏘の『傳奇』に由來するというのが、從來の一般的な考え方だったからである。しかし、傳奇という言葉だけを取りあげて、その元始が裴鏘の作品集『傳奇』にあるという説は、實際には事實と異なるもので修正されなければならない。けれ

ども『傳奇』に取られている素材、用いられている筆法等は唐代小説を代表するにふさわしいものがあり、このことからすれば唐代小説一般を表す傳奇の名稱が、裴鏘の『傳奇』に依據すると考えられてきたことも肯ける。本稿では、裴鏘の小説集『傳奇』に用いられている「奇」の技法を、構成上の形式、素材の選擇、主人公の立て方の項目に分けて考察することにより、現在原本のままでは見られない『傳奇』の作品を認定する作業を行うと同時に、この作業を通して、唐代小説における「奇」の一形式と内容を摸索し示唆する一つの手がかりとしたい。

始めに、書誌、書目における著録の状況を見ていくことにする。『新唐書』『藝文志』には、子部小説家類に、「裴鏘傳奇三卷、高駢從事」と記録されており、『宋史』『藝文志』にも、同じく子部小説家類に、「裴鏘傳奇三卷」とある。それ以後の『藝文志』に『傳奇』の名は見られない。私家の書誌の中には、それぞれ以下のように記されている。

「傳奇三卷、唐裴鏘撰、唐志稱鏘高駢客、故其書所記皆神仙怪譎事、駢之惑呂用之、未必非鏘輩導諛所致」（傳奇

三卷、これは唐の裴鏘が撰した。「唐志」に「鏘は高駢の従事である」と稱している。故にその書の記事は、皆神仙怪譚の事である。高駢が呂用之に惑わされたことは、鏘の輩が導諷して致らしめたものであろう)『郡齋讀書志』卷十三…小説類。

「傳奇六卷、唐裴鏘撰、高駢従事也。尹師魯初見范文正岳陽樓記曰、傳奇體爾。然文體隨時、要之理勝爲貴、文正豈可與傳奇同日語哉。蓋一時戲笑之談也。唐志三卷、今六卷、皆後人以其卷帙多而分之也」(傳奇六卷、唐の裴鏘が撰した。高駢の従事である。尹師魯が初めて范文正の「岳陽樓記」を見て、傳奇の體であると言った。しかし文の體とは時に随うものである。要は理が勝つことを大事にしてゐる。文正の體をどうして傳奇と同日に語ることができようか。蓋し尹師魯が范文正の「岳陽樓記」を見て、傳奇の體であると言っているのは、一時の戲笑の談であるだけなのだ。「唐志」には三卷とあり、今は六卷というのは、皆後の人がその卷帙が多いことでそれを分けたのだ)『直齋書録解題』卷十一…小説家類。

とある。これらの記事によると、南宋では三卷本と六卷本

が通行していたようだ。更に元の馬端臨の『文獻通考』卷二百十六…子部小説家類には「傳奇三卷」と記され、その下に『郡齋讀書志』と『直齋書録解題』の記事が引かれている。しかし明の高儒の『百川書志』には

「傳奇一卷、唐裴鏘撰、高駢客也。皆神仙怪譚事。通考稱三卷、又分六卷、今止二十二事、恐非全書」(傳奇一卷、唐の裴鏘が撰した。高駢の客である。皆神仙怪譚の事である。『文獻通考』に三卷とあり、又分けて六卷とある。今は二十二の事に止まっているが、恐らく全書ではないだろう)卷八…子部小説家類

と記されている。以上の記事を総合してみると、『傳奇』の原本、或いは六卷本は、元から明にかけて失われてしまつたようである。このため現在では、當初傳えられていた形の『傳奇』は見られなく、宋代の類書『太平廣記』(太平)『類説』(類説)や『歲時廣記』等に収録されている三十篇程のものが、『傳奇』の作品として目撃できるだけである。これらの作品を中心にして、民國以後『傳奇』の選本、輯本が幾つか編まれている。そのおもなものは

一、『傳奇校補考釋』王夢鷗撰。『唐人小説研究』所収。

一九七一年。三十篇。

二、『斐鏑傳奇』周楞伽輯注。上海古籍出版社。一九七九年。三十一篇。

である。上記の書は何れも篇数が多く整然としたものだが、それでも各作品について『傳奇』の作品であると認定した根拠が必ずしも明確に示されていない。そこで、本稿では先ず『傳奇』の作品を周氏の書物に基づきながら、個別の作品を検討することによってそれぞれの作品自體が『傳奇』の作品であるかいなかを確認していくことにする。

文末掲載の圖表を参照されたいが、現在残っている篇目の中で、『傳奇』が作られた時期と一番近い時期にその作品を収録しており、作品の形態においても原本の姿が最もよく窺われるのが『太平廣記』である。『太平廣記』は版本、寫本にかかわる問題を考慮しなければいけないものがあるが、先ずいずれの版本、寫本においても『傳奇』の作品であると示されている作品は、二十四個條（1、孫恪、2、崑崙奴、4、崔煒、5、聶隱娘、6、許棲巖、7、韋自東、8、周邨、12、陳鸞鳳、13、高昱、14、裴航、15、張無頗、16、馬拯、17、封陟、18、蔣武、19、鄧甲、20、趙合、

21、曾季衡、25、江叟、26、金剛仙、27、盧涵、29、陶尹二君、30、寧茵、31、王居貞、32、五臺山池）載っている。

更に『太平廣記』にやや遅れて編集されている『類説』には、二十二個條（1、孫恪、2、崔生、3、鄭德璘、4、崔煒、6、許棲巖、6、韋自東、8、周邨、10、薛昭、11、元徹、13、高昱、14、裴航、15、張無頗、17、封陟、18、蔣武、21、曾季衡、22、洛浦神女感甄賦、24、文籟、25、江叟、27、盧涵、28、顏濟、29、陶太白尹子虛、30、寧茵）載っている。これらの作品の中で、『太平廣記』『類説』の兩者ともに『傳奇』の作品として採録している十六個條（1、孫恪、2、崑崙奴、4、崔煒、6、許棲巖、7、韋自東、8、周邨、13、高昱、14、裴航、15、張無頗、17、封陟、18、蔣武、21、曾季衡、25、江叟、27、盧涵、29、陶尹二君、30、寧茵）は、原本『傳奇』の本来からの作品であった可能性が最も高く、ほぼ疑いの餘地がないものと思われる。この十六個條を取り出して各作品を詳細に見ていくと、それらには各作品ごとにめぐらされている作者特有の入念な表現技法とは別に、構成方式、素材選別等において作品全體に共通し且つ一貫する趣向——外面的特徴——が見いだせ

る。第一は、作品の構成が、史書の列傳の形式に倣いながらも結末の論評部をなくしており、これにより話はよりストーリー中心のものになっている。第二は、作品の素材として、必ず世間並みの人ではない奇人（「超人」「異人」「化人」）を扱っている。第三は、作品の前半の人定記述の一番目に擧がる人物（被立傳者の主體…本論文ではこの人物を主人公と命名する）を軸にして話を展開しており、その名を題名としている。

以上に指摘した三つの點がその共通の特徴だと言えるが、これを『傳奇』の根幹とみなしその他の作品もこれに関連づけて考えていくことにする。

一、作品の構成

『傳奇』での各作品の構成を見れば、作者は各作品の素材をどんなものにしても第三人稱によって事件を書いている。これは中國の文言小説の著しい發展を見たとする唐の小説——特に中唐小説——のほとんどが、史書の列傳の構成形式を踏襲していることと関連するものであろう。

「傳」とは

「傳、傳（平聲）也。記載事迹、以傳於後世也。自漢司馬遷作史記、創爲列傳以紀一人之始終、而後世史家卒莫能易（傳は傳えることである。事迹を記載して後世に傳えることである。漢の司馬遷が『史記』を作り、初めて「列傳」を爲して一人の始終を記してから、後代の史家はついにこれを變えることができなかった）『文體明辯』…傳序説とあるように、ある人の事迹を記載して傳えることが本領である。そのため傳は當然ながら事迹の事實性を保つことが大事であるわけで、立傳者はその事實性を保つために常に客觀的な立場を表す第三人稱によって「列傳」を書く。ここでその史書の列傳類の構成を見ると、それは基本的に

1、本文…人定記述

…事迹記述

2、結末…論評部

となっている。「傳」が人の事迹をつづる以上、本文の序頭に被立傳者が何處のどんな人物であるかを述べる人定記述があり、その後その人が何をどのようにしたかを述べる事迹記述があるのは當然のことである。しかしこの列傳類

の文章には更に結末に論評部が付いている。論評部とは周知のごとく、立傳者の人物乃至事件に對する批評、補足説明や個人的な感慨、思想を述べるもので、本文での被立傳者に關する人定、事迹の部の記事とは性質を異にする別個の文章である。つまり本文の記述においての立傳者は、作者としての一人よがり抽象に陥ることを避け、記述者の立場に立って被立傳者の出生、外貌、行爲、言語等を客觀的に具象化し讀者の前に展開していくことを比較的尊重する。

そのため立傳者と傳との間には一定の距離間隔が保たれている。これに比べ結末の論評の記述においての立傳者は、「太史公曰」「贊曰」「論曰」「評曰」「史臣曰」等の第三人稱的な評題語を用いる形式を取る一方、その内容は専ら被立傳者の事迹に對する記述者の主觀的な見解、價值判斷を述べることで本文を補足している。列傳の結末部にこのような論評が入る構成は、『史記』が書かれて以來『宋史』までの歴史書の傳統であった。

さて、魏晉以來の志怪、志人小説を練り上げ、ストーリー性に富み、文學的描寫にも優れ、質量ともに著しい成果を上げたと評價される中・晩唐の小説のことであるが、それ

らの作品の構成を見ると中唐人の小説形式はそのほとんどが史書の列傳の形式をそのまま踏襲し、作品の結末に前半のストーリーとは別個の論評の部が登場している。つまり作者は、本文で自分の伝えようとするある話を外側から眺める立場を保ち記述した後、結末には本文の記事に關連する記述者の主觀あるいは他者の主觀、亦その話が傳わった経路、動機等を述べる論評部を立てているのだ。例えば、「柳毅傳」では

「儀鳳中、有儒生柳毅者、應舉下第、將還湘濱、念鄉人有客於涇陽者……暇常以是事告於人世、殆四紀、暇亦不知所在」(儀鳳中に儒生、柳毅というものがいた。科擧に應じたが落第してしまい、ちょうど湘濱へ歸ろうとしたが、同郷の人が涇陽に住んでいることを思い出し……暇はこの話を世間の人々に話して聞かせた。しかし五十年近くなつた頃、暇も行方が知れなくなつてしまつた)との柳毅に關わる話の部があり、最後には

「隴西李朝威叙而歎曰、五蟲之長、必以靈著別斯見矣。人裸也。移信鱗蟲、洞庭含納人直、錢塘迅疾磊落、宜有承焉。暇詠而不載、獨可隣其境、愚義之、爲斯文」(隴西の

李朝威はこの話を述べた後、歎息しつつかう考える。五蟲の長は必ず靈妙さで目立つことがここに現れる。人は裸蟲で、鱗蟲に手紙を運んだ。洞庭君の度量の廣さと率直さ、錢塘君の果斷と豪放さがそれを受け入れたのだ。蝦はそれを物語っていたが文字にしてはいなく、彼獨りがこの境地の近接していた。私はこれらを義となしこの文章を作る」とある。「隴西李朝威叙而歎曰」という評題語を用いて論評部を書き、この話を記録するようになった心境の動機と作者の主觀的な感想を載せている。他にも中唐の小説には「前華州參軍李肇贊曰」（「南柯太守傳」）、「君子曰」（「謝少娥傳」）、「讚曰」（「馮燕傳」）等の評題語をなした論評部が付いており、評題語がなされていなくても、「嗟呼……」（「李娃傳」）、「予嘗於朋會之中」（「鶯鶯傳」）、「噫……」（「無雙傳」）等の語句を境界とする以下の部分では、一篇の文章を書くに至った動機等の内容を持つ、列傳類の論評部と同じ性格の文章を書き加え、一篇の作品を構成しているのが大部分である。この現象は、「雜うるに虚誕怪妄の説を以てするも、その源を推せば蓋し亦史官の末事なり」（『隋書』「經籍志」）とする小説認識——小説家を他の諸家

の價値に及ばないものとする認識。『漢書』「藝文志」小説家類に、「小説家者流、蓋出於稗官。街談巷語、道聽塗説者之所造也。孔子曰、雖小道、必有可觀者焉。致遠恐泥、是以君子弗爲也」（小説家の流は蓋し稗官から出たものである。街談巷語、道聽塗説する者どもが作るものである。孔子が言った。小道であるといえども必ず見るべきものがある。遠く至ることはなはずむことを恐れる。このため君子はこのようなことはしない）とある傳統的認識の延長——をそのまま受け繼いでいるものであると言えよう。

しかし『傳奇』は、ストーリーの展開部が一貫して史書の列傳の書き方に倣う方式を取っていないながらも、敢えて最後の論評部を脱落させている。例えば「孫恪」では

「廣徳中、有孫恪秀才者」（廣徳中に孫恪という秀才がいた）と言う人定記述から話が始まり、

「恪遂惆悵、艤舟六七日、携一子而回棹、不復能之任也」

（恪は嘆き悲しみながら、六七日も船出を延期していたが、二人の子どもを連れてさおを返したまあととう任地へは赴かなかつた）と言うことで話は終わりになっている。廣徳中に孫恪と言う秀才がいたという記述から話が始まり、

その後事件は次のように展開する。彼は袁氏という一人の女と出会い、結婚し、貧乏暮しを免れ豊かに三四年間を過ごす。その後、ある日ふと従兄弟の張間雲處士と會つたところ、恪には妖氣が濃く漂っており、それは袁氏が妖怪だからかも知れないと言つて、彼の寶劍をもつて試してみさせる。しかし何も起こらない。さらにその後十年餘り經つたころ、袁氏は二人の子供を産んでいたが、恪は南康の張

萬頃大夫からの推薦をもらつて經略判官の職につき、家族連れで赴任することになる。その途中端州から半日ほどの峽山寺に着いたところ。袁氏は彼と二人の子供に向かつて泣きながら別れを告げ、着物を引き裂いて年老いた猿に姿を變え他の猿に付いて行つてしまった。そして恪はそれを嘆き悲しみ、とうとう任地へは行かなかつたとの末尾で話が終わる。このような構成で、作者はこのストーリーに對し如何に奥深い感想を持っていたとしてもそれを語る場を省き、批判とか感想とかを抱く權利一切を一方的に讀者に委ねている。その結果、作品は論評部が付いている構成よりも一層ストーリー性豊かなものになっている。『傳奇』がこのような構成を取っていることはストーリー自體に對

する興味だけに關心を置く作者の意識の反映で、好きで小説を書きながらも小説を専ら史書の列傳體の派生物、從屬物としてしか捉えられず、ひたすら列傳體を踏襲する形式を借りてだけ小説を書いた中唐期の小説作家に比べ、小説作者の意識の面において面貌を新たにしたものだと言えよう。

二、作品の素材

『傳奇』での各作品の素材を見れば、専ら奇を求めている傾向が著しい。これは一篇の作品の中に必ず一人以上の奇人——凡人ならざる人物——が登場していることから確かめられる。このような奇人を、その能力のあり方によつて「超人」「異人」「化人」の三つの類型として區分してみることが出来る。以下十六箇條を中心に、全作品に亘つて奇人の内容を一つ一つ見ていくことにする。

1、超人

これは、人間の次元を超越して人間社會の秩序に拘束されない世界での超人——仙、神、鬼——を作品中に登

場させて話を展開していくものを指す。さらにこれはストーリーの展開と背景により、「異界訪問談」形——人間界の主人公が何かのきっかけで超人の住む異界を訪問し珍奇な経験をするに至る形——と、「下界出現談」形——主人公が住む人間界に超人が出現し人間の常識では解せない神秘を行う形——とに分けてみられる。十六箇條内に前者の形を取っているのは以下の四箇條が挙げられる。

4、「崔煒」主人公崔煒が古い井戸の中に落ち、皇帝玄宮（南越王趙佗の墓）を訪れる話。

6、「許棲巖」主人公許棲巖が涯下に落ち、洞中の仙界を訪れる話。

14、「裴航」主人公裴航が藍橋下で仙窟を訪れる話。

15、「張無頗」主人公張無頗が南海水宮を訪れる話。

十六箇條外では以下の二箇條が挙げられる。

11、「元柳二公」主人公元徹、柳實の二人が、孤島の

仙界を訪れる話。

28、「顔濬」主人公顔濬が冥界を訪れる話。

十六箇條内に後者の形を取っているのは以下の五箇條が挙げられる。

13、「高昱」主人公の高昱の前に現れる道人唐句驚。

17、「封陟」主人公の封陟の前に現れる仙姝上元夫人。

21、「曾季衡」主人公の曾季衡の前に現れる鬼王使君女。

25、「江叟」主人公の江叟の前に現れる道人鮑仙師。

29、「陶尹二君」主人公の陶太白、尹子虚の前に現れる二仙（秦の役夫と宮女）。

十六箇條外では以下の五箇條が挙げられる。

3、「鄭德璠」主人公の鄭德璠の前に現れる老叟洞庭

水府君。

10、「薛昭」主人公の薛昭の前に現れる地仙張雲谷。

20、「趙合」主人公の趙合の前に現れる鬼李文悅。

22、「蕭曠」主人公の蕭曠の前に現れる洛神と龍女。

24、「文簫」主人公の文簫の前に現れる仙姝。

以上に示した作品にはいずれも、人間界の凡人の常識の範囲を越えた超自然世界の人物——超人——が登場し、それらの神秘さが「奇」の内容となっている。ところでこれらの作品はすべてストーリー自體甚だ多様性を持ち表現も委曲を盡くしているが、筋運びを総合的に支配しているのは

人間の力では不可抗力の「宿命」に歸結する。それを端的に物語ってくれる表現を見ると、「崔煒」では、古い井戸の中に落ち、偶然皇帝玄宮に入った崔煒に向かって宮女は、「崔子既來、皆是宿分」（崔子がここに來たのは皆天の定めである）と言ひ、亦見ず知らずの田夫人が崔煒の夫人になるとのことで、「願君子善奉之、亦宿業耳」（君子はどうぞ大切にしてください。これも亦天の定めなのです）と言っている。「許棲巖」では、許棲巖が仙人の宴會に參席すると東黃君という仙人は、「許長史孫也。有仙相也」（許長史の孫であつて、仙人の相がある）と言ひ、後人間界に戻るうとしたとき太乙眞君は、「子有仙骨、故得値之」（あなたは仙骨があるから、これ（龍馬）に出合つたのだ）とも言っている。「裴航」では、仙人になれた裴航に向かつて仙人の老婆が言うことには、「裴郎自是清虛裴眞人子孫、業當出世」（裴郎は元から清虛裴眞人の子孫であつて、天の定めが仙人になるようになってゐる）とあり、「張無頗」では、人間を愛するようになって水宮から人間界に行く娘に向かつて府君は、「檢於幽府云、當是冥數」（幽府で調べてみたら、これは天の定めであつた）と言っている。「元柳

二公」では、颶風にあつて孤島の仙界に入った元柳二公をみた南溟夫人が、「昔時天臺劉阮、今有元柳、莫非天也」（昔は劉・阮がいて、今は元・柳がいることは、すべて天のなせるところである）と言ひ、亦人間界に戻る二人に向かつて、「子但宿分自有師……」（あなた達は但天の定めとして師がいる）と言っている。「高昱」では、僧人、道人、儒人が次々と水猪に浚われた後、「高昱長吁曰、命也」（高昱が長く歎じて言つた。天の定めである）と言っており、「封陟」では、蜘蛛が封陟を訪ねてきて自分と一緒になるように説く部分で、「某以業緣遽繫……」（私は天の定めによりにわかにからまり……）とある。「曾季衡」では、王使君の愛女である鬼が、冥界から來る自分のことを「他人には知らせないように」との約束を破つた曾季衡に向かつて別れを告げ、「殆非君之過也、亦冥數盡矣」（恐らくあなたの過ちではない。これは天の定めが盡きたのでしよう）としてゐる。「鄭德璘」では、德璘が自分の人生の中で出來事を考へて「命也」（天の定めである）と言ひ、「薛昭」では、張雲谷が薛昭と會つて、「此乃宿分、非偶然也」（これは乃ち天の定めであつて偶然ではない）と言っており、

「蕭曠」では、雙美亭で曠と會つた神女が別れに臨み曠に向かつて、「君有奇骨異相、當出世」（あなたは奇骨異相がありますので必ず仙人になるでしょう）とある。これらは全て「宿分」「天」「命」「仙相仙骨」「業」「冥數」等、人間の力では到底動かすことのできない絶対的な力を持つ言葉で表現され、人の世の波亂に富んでいるもの全てが予め天から定められている不可抗力に因るものであるとの立場に立っている。これは中國人の昔からの天命の思想が影響していることであろうが、作者自身の人生觀、宇宙觀とも關係するものであろう。作品中の凡人たちがその超人との關係において積極的、肯定的な立場を取ると團圓の結びとなり、消極的、否定的な立場を取ると不幸か、亦是悔いのある結びになるのである。

2、異人

これは、人間界に生を受けた同じ人間でありながら、人並はずれた能力や奇なる力を持っている異人を作品中に登場させて話を展開していくものを指す。十六箇條内では以下の四箇條が挙げられる。

2、「崔生」崔生の下僕である馬勒が、主人の叶わな

い戀を叶わせるため奇術を働かせる。

7、「韋自東」義烈の士で、人を害する夜叉を切った。

8、「周郎」周郎の下僕である水晶が、水中によく潜ることができた。

18、「蔣武」弓術が非常に優れている。

十六箇條外では以下の五箇條が挙げられる。

5、「聶隱娘」俠士で、武術に優れている。

9、「樊夫人」（湘媪）病氣をよく直すことができた。

12、「陳鸞鳳」氣義を自負する人で、雷神を退治した。

19、「鄧甲」蛇を制御する術があった。

26、「金剛仙」梵音に能があつて、よく呪文をなした。

以上に示した作品にはいずれも、普通の人間が行うことのできない特殊な能力が發揮できる最も特色ある人物——異人——が登場し、彼らの人並はずれた活躍ぶり、珍しさが「奇」の内容となつている。「崔生」では、自分の仕えている若旦那が叶わぬ戀の病で悩んでいるとき、隱語を解いて意を解し、戀人が住んでいる一品貴族の家の幾重にもなる堀を、若旦那を背負つても風のように越えられるという馬勒の異人ぶりが描かれている。「韋自東」では、僧人を食っ

た夜叉が住んでいると云われる山の中の精舎へ行き夜叉を切り殺して歸ってくるという韋自東の義烈の異人ぶりが、「周郎」では、水に入り一日が経っても平氣で居られるという水晶の異人ぶりが、「蔣武」では、大蛇の光る目を遠くから射當てその蛇を殺すことができるという蔣武の弓術の異人ぶりが描かれている。亦「聶隱娘」では、人に氣づかれず眞晝の町の中で人を刺し殺せ、亦目に見えないほどの早さで刀が使える等の劍術を持っている聶隱娘の異人ぶりが、「樊夫人」（「湘媼」）では、丹篆文字でよく病を直し、三年も使わずにいて固くなっている足を水を噴くことで回復させたり、鼈の化物の城に向かい、水を噴いた劍を飛ばして鼈の心臓を刺殺し人々を難から救い出したりする湘媼の異人ぶりが述べられている。「陳鸞鳳」では、死を恐れずして雷神と戦い勝利を収める陳鸞鳳の異人ぶりが、「鄧甲」では、全ての蛇を呼び、それに命令を下すことができるという鄧甲の異人ぶりが、「金剛仙」では、梵音に通じてよく呪文をなし、潭の水を辟いてその中の龍も取り出すことができる金剛仙の異人ぶりが、斐鏑の筆によりそれぞれの作品の中で生き生きと描寫されている。

さて、これら異人素材の作品には義を見ては危も恐れないう義行や、弱き者に對して哀れみを施す善行等の教訓的志向が目立っているが、本領は、その義行或いは善行等を記述することにあるのではなく、作中の主人公である異人の思考と行動による異人ぶりを伝えることにある。だから作品の主人公は、ほかでもない異人そのものになっている。ただし「崑崙奴」と「周郎」の條だけは例外で、作中の主人公は異人である馬勒、水晶ではなく、彼らの主人である崔生、周郎になっている。その理由は、馬勒、水晶の二人が共に異人であるとは言うものの、彼らは主人に所有され買われたり賣られたりする奴隸の身分であったからで、これは唐代の身分社會を反映する一断面として見ることができる。それに超人素材の各作品でも確認できたように、作者は文人階級の一員として、人間界の出來事すべて天の定めであるという意識が強く、時流に流れる性向を持っていることの現われであるとも言えよう。

3、化人

これは、異物が人間に化け人間と同じく生活をしたり人間の言葉を話したり人間の行動をしたりする化人を作品中

に登場させて話を展開していくものを指す。十六箇條内では以下の三箇條が擧げられる。

1、「孫恪」主人公である孫恪が、袁氏と出會つて結婚し一緒に暮らしたが、その袁氏は猿の化物であった。

27、「盧涵」主人公盧涵が、萬安山の南にある莊に行く途中一人の女と出會い酒を飲んだが、その女は大きな盟器婢子の化物であった。

30、「寧茵」主人公寧茵の寮莊へ二人の男が尋ねてきて一緒に遊んだが、その二人の男はそれぞれ牛と虎の化物であった。

十六箇條外では以下の二箇條が擧げられる。

16、「馬拯」主人公馬拯が、衡山祝融峯の伏虎師を尋ねたが、伏虎師は虎の化物であった。

23、「姚坤」主人公姚坤の所に一人の女が尋ねてきて結婚し一緒に暮らしたが、その女は狐の化物であった。

以上に示した作品にはいずれも、不思議なことに人間以外の存在（猿、盟器婢子、牛と虎、虎、狐）が人間の形象に

化けた人物——化人——が登場し、人間と同じく笑ったり悲しんだり、徳を施したり悪を働いたり、果てには人間の子供を産んだりする異常さが「奇」の内容となっている。化人が小説の素材となることは早くも後漢末の「化け物語」にその原形が求められ、魏・晉・六朝の志怪の中ではもう既に定着している。その話の一般的パターンは

1、モノが人間の姿に化け人間の生活ぶりを眞似ることで人間を騙す——（迷惑をかけたたり害を及ぼしたり等の悪を働く存在）

2、その内化け物の正體は露顯され退治される

というものであった。このパターンは中國の化け物語の一つの大きな特徴として存在するもので、中國で初めて化け物語が生まれるときの背景（註）（後漢代、死んだものの靈は有知で祟りをなすと信じ靈を祭ることに過大に努力を費やす風俗があった。このような社會情勢の中で心有る者たちが、時俗を刷新する方便として新たに鬼神論を追求しているが、その努力の一環から化け物語が生まれた）が既にその性格を決定したものである。『傳奇』の「盧涵」「馬拯」はその典型を踏まえている形である。これに比べ、「孫恪」「姚坤」

はストーリーの展開に變化が見られる。^註まず「孫恪」を取りあげてみよう。

「孫恪が洛陽あたりでぶらついていたらと、偶然にも袁氏の家へ入りその家の娘のように見える女に心を寄せ、事情を聞いてみれば、彼女は幼いときに父母に先立たれ、今は四五人の召使いと住んでいてまだ嫁に行っていないとのこと。二人は共に心を許し新しい世帯を持つようになった。袁氏は今まで貧乏暮らしを強いられていた孫恪を裕福にさせ、十三四年間の結婚生活に子供も二人生育した。ある日、舊友の推薦で經略判官の職に付くようになった孫恪は家族を連れて南康に向かう。ちょうど端州の峽山寺に着いたとき、袁氏は周りに集まった猿に誘われ、自分の着ていた衣を裂いて猿に變わり深い山に入ってしまった」とする。この作品はストーリーの展開からして、前に述べた化け物話のパターンの陰はほとんど感じられない。化け物の猿ではあっても、人間を騙し、迷惑をかけたたり害を及ぼしたり等の悪を働く存在ではない。さらに正體露顯により退治される化け物でもない。この作品のストーリーの展開はむしろ前述した「超人」素材の話に近い部分がある。孫恪が偶

然に袁氏の家へ入るのは、「超人」素材の話での主人公が異界に迷い込むようなものであり、その彼が袁氏の家で裕福で幸せな生活を送るのは、「超人」素材の話での異界に迷い込んだ主人公が、そこで楽しい生活乃至はよい経験ができるようなものである。その裕福で幸せな生活の後彼に突然訪れる別れの唐突さは、「超人」素材の話での楽しい生活乃至はよい経験の後主人公に突然訪れる別れの唐突さと同様のものである。

さらに「姚坤」の話も取りあげてみよう。

「處士姚坤は萬安山の南で釣りをして自適の生活を送っていた。隣には狐、兎を狩って生活する獵師がいたが、坤はいつもその獵師が捕らえた獲物を購って放してあげた。ある日、彼の處に天桃という女が訪ねてき、自分は幼いときに家を出てきた者で家には歸れなくなったので坤に仕えたいと願い出る。坤はその女の容姿がきれいだったので受け入れた。そのことがあって後、坤は皇帝の招きによって天桃を連れて都へ向かった。盤豆館に至った頃、曹牧の使者が良犬を連れて通った。その良犬は天桃を見るとすぐさま後込みしてしゃがむ。天桃は變身して狐になってから犬

の背中に跳びあがりその目をえぐりだす。犬が驚いて盤豆館を出て荆山のほうに逃げる。坤が就いて行ってみたら、犬は途中で死んでおり狐はいなくなっていた。その夜ある老人が酒を持って訪ねてきたが、以前からの知り合いだと言う。それから酒を飲み終わって歸るときに、「君に報恩することもこれで足りたであろう。私の孫も無事である」と言ってから見えなくなった。坤はやつとその老人が狐であることがわかった」とする。この作品もストーリーの展開からして、前に述べた化け物語のパターンの陰はほとんど感じられない。化け物の狐ではあっても、人間を騙し、迷惑をかけたたり害を及ぼしたり等の悪を働く存在ではない。更に正體露顯により退治される化け物でもない。それにこの話は「説話」のテーマとしてしばしば取りあげられる「動物の報恩談」のパターン——人間が何かの形で動物に恩を施す。恩を感じた動物が自分に恩を施してくれた人に報恩する（この報恩説話の中で恩を施す人が未婚の男性である場合、報恩の内容は大概その男性に美人の妻を迎えさせる）パターン——を應用していることが確かめられる。

さて、これら各作品は、その素材が超人、異人、化人の

いずれであっても、神仙、道家的仙人の世界がその内容の大部分を占めている。これは社會秩序が混亂し、道の思想が好まれていた晩唐の時代背景に影響されていることもあるだろうが、その最も大きな原因は作者の生涯と深く関係することと思われる。しかし裴鏞の生涯については、残されている資料が乏しいため詳細を知ることにはできない。

『全唐文』卷八百五では、彼の文章「天威徑新鑿海波碑」を載せ、

「裴鏞、咸通中爲靜海軍節度高駢掌書記、加侍御史内供奉、後官成都節度副使、加御史大夫」（裴鏞は咸通年間、靜海軍節度使高駢の書記を司つていて、侍御史内供奉を加えられた。後には官職が成都節度副使になり、御史大夫を加えられた）

と見えている。また管見の及ぶ限り裴鏞の著作は、『傳奇』以外に「石室詩」（『唐詩紀事』卷六十七）、「天威徑新鑿海波碑」（『全唐文』卷八百五）、「道生旨」（『雲笈七籤』卷八十八・仙籍旨訣）の三篇がある。その中で、「道生旨」を見るに

「鐘陵郡之西山、有洪涯壇焉。壇側有棲眞子楊君知余有

道、詣予請述道生之宗旨、余曰、子不聽、西昇經云、人徒知天地萬物而不知生之所由……」（鐘陵君の西山に洪涯壇がある。壇の側に棲真子楊君がいて私に道があることを知り、私のところに來て道生の宗旨を述べてもらいたいと請うので、私は言った。君はまだこのことを聞いていないのか。西昇經に言うには「人はただ天地萬物を知るだけで生の由縁を知らない……」）で始まり、長生きを求めめるには先ず生の本になっていることを修めるべきであるとし、その生の本は陰陽の數と五行の運に従う氣と神の變化の理を上手に養うことにあるとのこと——「吁萬物有終而天地長久、人民有死、真人長生。乃俱陰陽交感之氣矣。人能守其陰陽、陰陽亦能守人矣」（ああ、萬物には終わりがあるが天地は長久であり、人々には死があるが真人は長生する。とすればすべて陰陽交感の氣である。人がその陰陽を守らるならば陰陽もその人を守る）——を、道家の見地から延々と述べている。その後には、

「但能寂然不動、感而遂通、泯滅萬慮、久久習熟、用晦而明、必得道矣」（ただ寂然として動じず、感じてついに通觀でき、萬慮を泯滅し、何時までも習熟して、晦を用い

て明とするならば、必ず道を得るであろう）と結んでいる。この文章を見ると、彼が如何に道家、神仙の術に耽醉し精通していたかが窺われる。更に「谷神子斐鏑述」とある撰者の道名からも、彼は専ら玄妙なる道を信じ、不老不死を念願していたことが判る。それが彼の小説集『傳奇』にも不可缺の要素として深く影響しており、それが後世の人の『傳奇』を罵った「神仙怪譚のことである」という評價を産んでいるのである。

三、主人公

作品の素材の部で述べたように、『傳奇』は超人、異人、化人に分けられる奇人を各作品の素材にし奇を伝えようとするということを見た。だとすれば、この奇人を被立傳者の主體——主人公——とするのが普通で、論評部を缺いていても史書の列傳の構成に倣った『傳奇』の形式上、この奇人こそ文章の初めの人定記述に紹介されるべき人物であろう。しかし『傳奇』では、素材を「異人」から取っている作品だけが奇人を主人公としており、その他の「超人」

「化人」から素材を取っている作品は例外なく奇人以外の凡人を主人公とし、その凡人の経験を通して超人、化人の持つ奇異さを傳えている。これは作者の奇を傳える方法として真によく仕組まれているものと見受けられる。というのは、作品の素材を異人から取った場合、その異人を主人公にし、彼の奇異な行跡を内容にしても、異人は讀者の住む人間界の人物であるためその出来事はこの世の中で起きたこの世に有り得る話だという前提が暗黙の内に了解される。しかし作品の素材を超人や化人から取った場合、冒頭から超人や化人が主人公として登場してしまうと、超人、化人に對する好奇心は作用するものの、最初から人間界の話ではない仙、神、鬼或いは化け物の假構された話に過ぎないという觀念が先立つ。こうなると作者が本當に傳えようとする「眞實めかした眞の奇」は傳え難くなる。そこで作者は超人や化人を奇の素材にしている作品では超人や化人の名をそのまま掲げて立傳する形を取らない。身近にある凡人を主人公とし、その主人公が作品内で實際に超人、化人と關わりを持って體驗する奇を描くことにより、讀者にもそのような奇が體驗できるように傳えているので

ある。それ故に立てられた主人公はある種の人物と決まったものではなく、若き人から年寄りまで、文士があれば武士もあり、道家の學業を修めている人がいるかと思えば儒家、佛家の學業を修めている人もあり、男女を問わず様々な顔と様々な性格をもっている。これら主人公は、ただ超人、化人の奇異さを傳えるのに適している人物であればそれでよい。このような理由から、『傳奇』の各作品はその素材のあり方に依って主人公の立て方が違っている。異人の素材はその異人が主人公に、超人、化人の素材は他の凡人が主人公に各々立てられて一篇の作品が完成されている。これは作者が小説を書き、奇を傳えようと意圖した際に、一層の奇の効果をあげるため用いた契機であると言えよう。更にここで年號について觸れておきたいが、圖表から確認できるように、『傳奇』では異常さを感じるぐらいその事件が発生した時間を缺かすことなく記している。これは『傳奇』に傳えている話が、ただの假構ではないとする證據の一役を果たすもので、作者が作品の脚色に如何にこだわり念を入れているかを物語る。尚、この中に書かれている年號は、「廣徳中」（「孫恪」）から「大中年」（「寧茵」）

に亘っており、これは中唐（代宗中間）からはじまり、斐鏑が高駢の従事になっている咸通年間の前までの百餘年間に亘っている。

以上原本『傳奇』の本来からの作品であると思われる十六箇條に一貫して適用される。三つの共通點を考察してきた。この三つの共通點を『傳奇』の特徴とみなし、周本に挙げられている十六箇條外の作品が、『傳奇』の作品であると認定できるか否かを考える。

3、「鄭德璘」「類説」には『傳奇』の作品とされる「鄭德璘」が、『太平廣記』では「出傳記」とあるのは、「薛昭」「蕭曠」「姚坤」「顔濬」の條と同じく、『太平廣記』の轉寫の誤りであろう。なぜならこの作品は『傳奇』の三つの特徴を具えているからである。更に、『太平廣記』に見える唐の劉餗の『傳記』を考察してみると、その内容は唐以前の雑多な知識を記したもので、構成、素材、時代等がこの作品とはまったく異なっているからである。

5、「聶隱娘」「太平廣記」に「出傳奇」と見え、また

『傳奇』の三つの特徴を具えている。

9、「樊夫人」「太平廣記」に「出女仙傳」と見えている。この『女仙傳』は撰者が闕名である。宋初の『太平廣記』にはこの「樊夫人」を合わせた十箇條の記事を「出女仙傳」としているが、それまでの「藝文志」にはその書名が見えていない。このことからして『女仙傳』は五代朝に女仙に関する先人の記事を集録した書物であると思われる。さてこの「樊夫人」の條について考察してみると斐鏑が書いた『傳奇』の内容に當たる記事は、恐らく後半の「唐貞元中、湘潭有一媪、不云姓氏、但稱湘媪」（唐の貞元中に湘潭に一人の媪がいたが、姓氏は言わずただ湘媪と稱していた）から

「拱遂歸湘潭、後媪與逍遙一時返眞」（拱は遂に湘潭に歸った。後に媪は逍遙と同時に神仙になった）までの部分だと思われる。と言うのは、晉の葛洪の『神仙傳』（『増訂漢魏叢書』）には

「樊夫人者、劉綱妻也。綱仕爲上虞令、有道術……夫人平坐、冉冉如雲氣之昇、同昇天而去」（樊夫人

というものは劉綱の妻である。綱は官職に付き上虞令となった。道術があり……夫人は平座して、冉冉と雲氣が昇るように一緒に天に昇りさった」と、『太平廣記』の「樊夫人」の前半部だけが載っている。それなのに清代（康熙四十九年）の類書である『淵鑑類函』（巻四百四十一「鱗介部」…鼈）は

「傳奇曰、貞元中有湘媼、常以丹篆救人病、一日告郷人曰、往洞庭救數百人性命……媼乃劉綱妻樊夫人也」（『傳奇』にいう。貞元中、湘媼という者がいた。常に丹篆を用いて人を病から救った。ある日、郷人に告げ「洞庭に行つて數百人の生命を救う」と言った。……媼はすなわち劉綱の妻樊夫人である）と、『太平廣記』の「樊夫人」の後半部だけを抄録し「出傳奇」と記している。この『淵鑑類函』の記事が何に基づいているかは不詳であるが、恐らく撰者は『百川書志』に記されていた一巻本か或いは別に何かの基づくところがあったのであろう。以上のことで、『神仙傳』と『傳奇』は等しく仙人である劉綱の妻樊夫人のことを記事にしていることが確認

できる。このことで『女仙傳』の輯録者は兩方の記事を連続してしまい、『太平廣記』はこれをそのまま『女仙傳』の文章であると収録したものでなからうか。すなわち『太平廣記』に載っている「樊夫人」の記事の中で、裴鏘が書いた『傳奇』の内容に当たるものは、後半部分だけである。この作品は貞元中に丹篆を用いて人の病を癒す醫術に優れた湘媼を主人公とした『傳奇』の異人素材の話である。勿論この部分だけで『傳奇』の三つの特徴を具えている。

10、「薛昭」『類説』には『傳奇』の作品とされ、亦『傳奇』の三つの特徴を具えている。『太平廣記』に「出傳記」となっているのは轉寫の誤りであろう。亦題名は『太平廣記』では「女仙」の項目に入っているため、女仙の名「張雲谷」を題としているが、本来の題名は『類説』に見える「薛昭」の方であると思われる。

11、「元柳二公」『類説』には『傳奇』の作品とされ、亦『傳奇』の三つの特徴を具えている。『太平廣記』

では「出續仙傳」となっているが、この『續仙傳』は五朝（南唐）の沈汾の撰であって、その内容は沈汾の創作ではなく、前人の創作の内、『神仙傳』『列仙傳』等の書に入っていない神仙に関する記事を収録したものにすぎない。

12、「陳鸞鳳」『太平廣記』に「出傳奇」と見え、亦『傳奇』の特徴を具えている。

16、「馬拯」『太平廣記』に「出傳奇」と見え、亦『傳奇』の特徴を具えている。

19、「鄧甲」『太平廣記』に「出傳奇」と見え、亦『傳奇』の特徴を具えている。

20、「趙合」『太平廣記』に「出傳奇」と見え、亦『傳奇』の特徴を具えている。

22、「蕭曠」『太平廣記』に「出傳奇」と見え、亦『傳奇』の特徴を具えている。『太平廣記』の談刻本には「出傳記」と、明抄本で「出傳奇」となっている。

『傳奇』の特徴を具えていることからみて、『太平廣記』談刻本の出典銘記は轉寫の誤りであろう。題名は『類説』に「洛浦神女感甄賦」と見えているが、

主人公に立てられている蕭曠の名を題名とする方が順當であろう。

23、「姚坤」『太平廣記』に「出傳記」と見えているが、『傳奇』の特徴を具えていることからみて、『太平廣記』の出典銘記は轉寫の誤りであろう。

24、「文蕭」『類説』には『傳奇』の作品とされ、亦『傳奇』の特徴を具えている。さらに『傳奇』の原本が世に行われていた南宋の陳元靚の『歲時廣記』に『傳奇』の文章が三箇條引かれているが、その中の卷三十三「入仙壇」に

「傳奇大和末歲有書生文蕭者……」（『傳奇』には大和末歲の書生文蕭という者がいて……）と「文蕭」が『傳奇』の作品であると記されている。

26、「金剛仙」『太平廣記』に「出傳奇」と見え、亦『傳奇』の特徴も具えている。

28、「顔濬」『類説』には『傳奇』の作品と見え、『太平廣記』の談刻本には目録だけあって本文は見えず、明抄本には「出傳奇」と見えている。その文章をみると『傳奇』の特徴も具えているし、『歲時廣記』

にも『傳奇』の作品として引かれていることからみて、『傳奇』の作品であることに違いない。

31、「王居貞」『太平廣記』に「出傳奇」と見えている。

亦この文章の構成や化人の素材を用いている点からは、一見『傳奇』の作品のように見える。しかし作品内の事件發生の時間が記されておらず、亦『傳奇』の化人素材は、すべて異物が人間に化けるといふものであって人間が異物に化けるといふものはない。

ところがこの條では、話の中心的役割を果たしているのは人間である主人公王居貞が異物の虎に化けるということであり、『傳奇』の作品とは認め難い。

32、「五臺山池」周氏の本には収められていなく、『太平廣記』に「出傳奇」と見えている。しかしこの作品は上記の『傳奇』の三つの特徴に全く合致していないことから『傳奇』の作品とは認めがたい。

これでもって、本稿では31と32の二箇條は『傳奇』の作品とは認めず、圖表の1から30までの三十箇條の作品を『傳奇』の作品と認定する。同時に9の「樊夫人」は前半部の『神仙傳』の記事は除き、中途の「唐貞元中、湘潭有

一媼、不云姓氏、但稱湘媼」から、「拱遂歸湘潭、後媼與逍遙一時返眞」までの記事を、裴鏘が書いた『傳奇』の作品「湘媼」であると認める。

注1、唐代小説を「傳奇」という名で概稱する。しかしその傳奇という稱號の始まりについて、常に問題視しながらもその定義は定説をみていない。小説史の中での解説をみると、

「唐人小説稱爲傳奇、始自晚唐裴鏘的『傳奇』一書、宋以後人道以之概稱唐人小説……」（唐人小説を稱して「傳奇」という。始まりは晩唐の裴鏘の『傳奇』という書物からである。宋以後の人はついに傳奇という言葉でもって唐人小説を

総稱するようになった）『中國文學史』游國恩等著・人民文學出版社

というような説明がなされ、その他の書物も何れこのような考えが基本になっている。つまり傳奇という名は、裴鏘の小説作品集『傳奇』の名にその發端を求めている。しかしこの言葉を初めて用いたのは裴鏘の小説集『傳奇』ではなく、中唐の元稹の小説「鶯鶯傳」の作品名ではなかったかと思われる。晩唐人である陳翰が編した『異聞集』（『類説』卷二十七）には、その作品の題名を「鶯鶯傳」ではなく、「傳奇」と記

している。「異聞集」は『新唐書』『藝文志』小説家類に「異聞集十卷、陳翰撰唐屯田員外郎」と見え、亦「崇文總目」小説類にも見えている。亦晁公武の『郡齋讀書志』卷十三小説家類には

「異聞集十卷、唐陳翰編、以傳記所載唐朝奇怪事、類爲一書」（異聞集十卷、唐の陳翰が編集した。傳記に載せられている唐朝の奇怪な事を類別して一書としている）とあり、陳振孫の『直齋書錄解題』卷十一小説家類には

「異聞集十卷、唐屯田員外郎陳翰撰。翰唐末人、見唐志。

而第七卷所載王魁乃本朝事、當是後人剿入之耳」（異聞集十卷、唐屯田員外郎陳翰の撰集である。翰は唐末の人だと唐志に見える。しかし卷七に見えている「王魁」の條は本朝宋のことである。これは後の人が取り入れたものである）と見える。元以後の書誌にはその名が見えていない。この纂輯書の流轉の推移は『傳奇』とよく似ている。何れも作者の纂輯時期は確定できない面があるが、『異聞集』は唐朝の奇怪を書いた小説の纂輯書であるのにもかかわらず、創作當時から盛んに行われたと思われる『傳奇』の作品を一箇條も載せていない點、亦『傳奇』の作品内に『異聞集』に載せられていた『洞庭靈姻』の記事（或傳柳毅靈姻之事、有之乎）『蕭曠』、『古鏡記』の記事（昔日王君携寶鏡而照鸚鵡）『孫恪』等が

見えている點から、『傳奇』より『異聞集』が少々早く世に行われていたと考えられる。その『異聞集』が元積の小説「鶯鶯傳」を「傳奇」という名で抄録しているのである。この他にも南宋初めの趙令時の『侯鯖錄』卷五に「辨傳奇鶯鶯事」という條目の記事があり、ここでも「鶯鶯傳」のことを「傳奇」と呼んでいる。更に同書に引用されている王銍の「微之年譜」にも「傳奇」を参照し考證がなされており、「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞序」にも

「大傳奇者、唐元微之所述也。以不載於本集而出於小説、或疑其是非、今觀其詞、自非大手筆、孰能與於此」（そもそも「傳奇」は、唐の元微之の作品である。しかし本集には載っておらず小説から出てきたもので、元微之の作品であるかどうか疑う人もいるが、今その詞を見ると當然大文章家の筆でなければ誰がこのようなことができようか）とある。以上のことから、傳奇という名稱は、元積が書いた小説「鶯鶯傳」の原題から始まるものであることが確かめられる。「唐志」に見える裴鏘の小説集『傳奇』三卷は、元積が用いた一篇の小説の名を模倣して自分の小説集の名稱としたものである。このようなことが實際、作品の数も多く、素材、筆法においても奇を伝えることに秀でている裴鏘の作品集『傳奇』が世に盛んに行われるようになったことにより、宋以後の人たち

は傳奇と云はず裴鏘の作品集の『傳奇』を連想するようになったものではなからうか。

注2、宋大平興國二年、李昉等撰。現行人民文學出版社刊行の『太平廣記』が、刊本、寫本に關わる問題を校勘してあるの
でそれを用い、必要に応じてそれぞれの版本に對して言及す
る。

注3、南宋紹興六年、曾慥編。鈔録、節録であり、誤字、脱字が
多いため資料として用いることに難點はあるが、作品集『傳
奇』が纏まった形となっている點は長所と言える。文學古籍
刊行社刊行本。

注4、本稿で使われる「主人公」の定義は、史書の列傳形式に倣
い、各作品の冒頭に姓名、出身地、身分（人定記述の内容）
等が明記されている人物の名を指す。

注5、列傳の構成と「列傳體小説」については、「假傳文學の研
究」（曹壽鶴・韓國、嶺南大學）の説の運用である。

注6、拙稿「文言小説史における『風俗通義』の『記風俗』の意
味。——怪神篇を中心に——」（『名古屋大學中國語學文學論
集』第六輯所収参照）。

注7、「寧茵」が化人を素材に取っていることは他の四箇條の作
品と同じであるが、ストーリーの展開において他の作品とは
全く違ふところがある。化人素材の話における初半部はその

ほとんどが、化人の正體を秘密に伏する形を取るが、「寧茵」
はこの定型的な圖式に倣わず初半部から隱密に化人の正體を
ばらし続け、人間と化人とが渾然一體となり一夜の酒宴を樂
しむ話にしている。これは化人素材の話に、作者の綿密な作
意により中唐に始まった「假傳」の筆法を取り入れたことに
よる應用である。これに對しては次の機會に詳しく論ずるこ
とにする。

** 圖 表 **

	周本傳奇 (年 號)	大平廣記本 題 名	類 說 題 名	備 考 (題 名)
1	孫 格 (廣 德 中)	卷 445 孫 格	孫 格	(孫 格)
2	崑崙奴 (大 曆 中)	卷 194 崑崙奴	崔 生	(崔 生)
3	鄭 德 璘 (貞 元 中)	卷 152 鄭 德 璘	鄭 德 璘	廣記) 出德璘傳 (鄭 德 璘)
4	崔 焯 (貞 元 中)	卷 34 崔 焯	崔 焯	(崔 焯)
5	聶 隱 娘 (貞 元 中)	卷 194 聶 隱 娘		(聶 隱 娘)
6	許 棲 巖 (大 中 末 年)	卷 47 許 棲 巖	許 棲 巖	(許 棲 巖)
7	韋 自 東 (貞 元 中)	卷 356 韋 自 東	韋 自 東	(韋 自 東)
8	周 邯 (貞 元 中)	卷 422 周 邯	周 邯	(周 邯)
9	樊 夫 人 (貞 元 中)	卷 60 樊 夫 人		廣記) 出女仙傳 (湘 媼)
10	薛 昭 (元 和 末)	卷 69 張 雲 容	薛 昭	廣記) 出傳記 (薛 昭)
11	元 柳 二 公 (元 和 初)	卷 25 元 徹 柳 實	元 徹	廣記) 出續仙傳 (元 徹 柳 實)
12	陳 鸞 鳳 (元 和 中)	卷 394 陳 鸞 鳳		(陳 鸞 鳳)
13	高 昱 (元 和 中)	卷 470 高 昱	高 昱	(高 昱)
14	裴 航 (長 慶 中)	卷 50 裴 航	裴 航	(裴 航)
15	張 無 頗 (長 慶 中)	卷 310 張 無 頗	張 無 頗	(張 無 頗)

16	馬 拯 (長慶中)	卷 430 馬 拯			(馬 拯)
17	封 陟 (寶曆中)	卷 68 封 陟	封 陟		(封 陟)
18	蔣 武 (寶曆中)	卷 441 蔣 武	蔣 武		(蔣 武)
19	鄧 甲 (寶曆中)	卷 458 鄧 甲			(鄧 甲)
20	趙 合 (大和初)	卷 347 趙 合			(趙 合)
21	曾 季 衡 (大和四年)	卷 347 曾 季 衡	曾 季 衡		(曾 季 衡)
22	蕭 曠 (大和中)	卷 311 蕭 曠	洛浦神女 感甄賦	廣記) 談刻本; 出傳記 明鈔本; 出傳奇	(蕭 曠)
23	姚 坤 (大和中)	卷 454 姚 坤		廣記) 出傳記	(姚 坤)
24	文 簫 (大和末)		文 簫		(文 簫)
25	江 叟 (開成中)	卷 416 江 叟			(江 叟)
26	金 剛 仙 (開成中)	卷 96 金 剛 仙			(金 剛 仙)
27	盧 涵 (開成中)	卷 372 盧 涵	盧 涵		(盧 涵)
28	顏 濬 (會昌中)	卷 350 顏 濬	顏 濬	廣記) 原有目無文 明鈔本; 出傳奇	(顏 濬)
29	陶尹二君 (大和初)	卷 40 陶尹二君	陶 太 白 尹 子 虛		(陶太白尹子虛)
30	寧 茵 (大中年)	卷 434 寧 茵	寧 茵		(寧 茵)
31	王 居 貞	卷 430 王 居 貞			
32		卷 424 五臺山池			